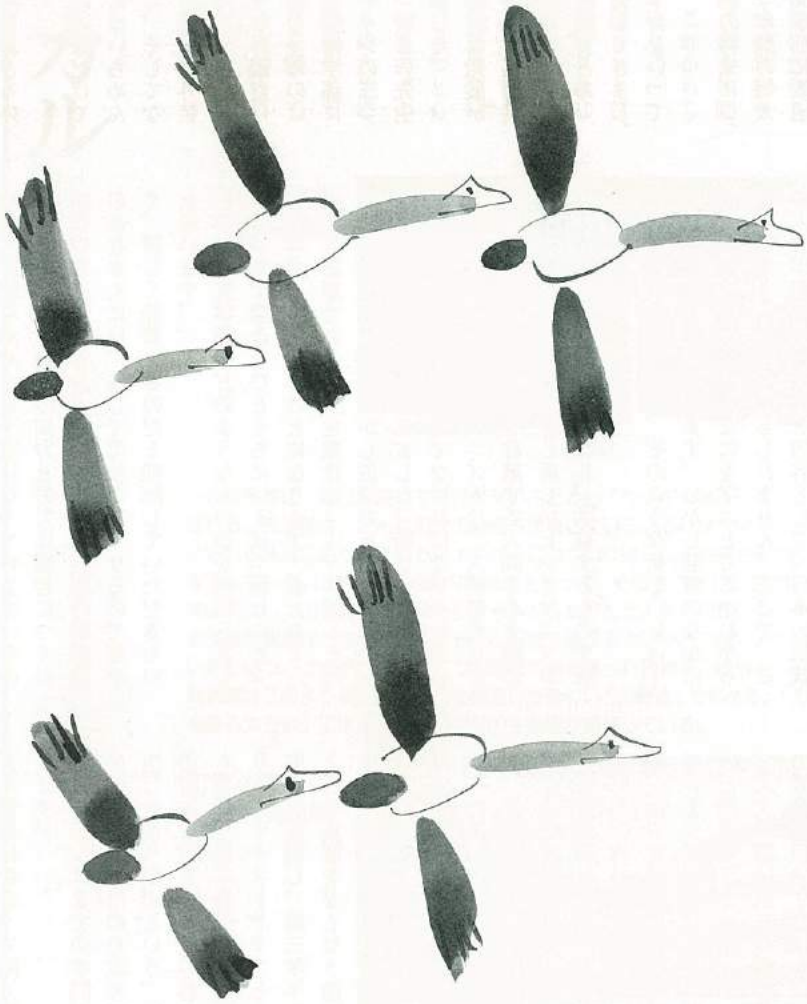
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

木野通信

第12号
1988年10月20日発行

京都精華大学　〒606 京都市左京区岩倉木野137　☎(075)791-6131



人文学部誕生にむかって

笠原　芳光

ひさしぶりに本学を訪れた人はみんなおどろいています。

変らないのは澄んだ空とまわりの山の緑だけで、校庭の木々は大きくなり、赤土の崖にはいちめんに草が茂り、グラウンドは西へ移動し、そしてなによりも三つの美しい校舎が建ち、本館まで外装と内部を一変したからです。

ここ二年あまりの変化は、そのような外観だけではありません。短期大学から大学になったのはすでに旧聞に属するとして、昨年から美術学部には版画・陶芸・アーバンリビングデザインの三つの分野が新設され、学生数は倍増し、新しい先生方もこられ、ますます活気がでてきました。

さらに短期大学英語英文科には画期的な発展が訪れようとしています。いままでも本学の英語英文科は英語と英米文学を学ぶだけではなく、英語を媒介にして世界の問題を考え、一般教育とあいまって内外の文化や歴史や思想を探究してきました。当初から人文学部的な傾向があったといってよいでしょう。

二年前から私たちは短大英語英文科の将来について真剣に検討しました。そして二十年間の短大の理念と実績をもとに、四年制の人文学部に改組することに踏みきったのです。昨年七月に文部省に申請し、きびしい審査をへて、本年十二月下旬に正式の認可がおりる予定になっています。そのために費した教職員の知力と労力は筆舌につくしがたいものがあります。短大英語英文科の卒業生のみなさんには、決して母校がなくなるのではなく、新しく発展するのだと理解していただきたいと思います。

その人文学部がどのようなものかを説明しましょう。まず理念をひとくちにいえば「新しいヒューマニズム」ということになります。もともと人文学の思想である人文主義はヒューマニズムと同じ意味であります。しかし従来のヒューマニズムは西洋中心の思恵でありました。新しいヒューマニズムは地球規模のものでなければなりません。

また今までのヒューマニズムは、人間尊重はよいとしても、人間だけを尊重する人間中心主義の傾向がありました。しかし新しいヒューマニズムは人間以外の自然とも調和し、共存するものでなければなりません。

私たちの人文学部は、そのような新しいヒューマニズムをめざしています。しかし若者のなかには人文学なんて古い、なにを学ぶところかわからないという人がいるかもしれません。そこで、この人文学部では具体的な内容として、「日本の伝統文化」と「異文化の理解」という二つのテーマを掲げました。京都は日本の伝統文化の本拠地です。また世界にむかって開く国際化は時代の急務であります。

さらにこれまでの学問が多くは書物中心、机上の勉強であったのを改めて、体験し、行動し、生活しながら学ぶという、いわばフィールドワークの方法を大きくとりいれることにしました。それも京都、日本全国、そして海外各地、とくにアメリカとオーストラリアとタイでは現地の大学や研究所と提携し、第三学年の後期を全面的に、そのような実習をともなう勉強に当てることにしました。

たとえば京料理の美学、北海道の開拓史、アメリカ文学の新傾向、オーストラリアの土着文化、タイの王制といったように、自分でテーマを選んで、体験的、行動的にも勉強して、最終学年で論文にまとめるという方法です。

人文学部は入学定員一八〇名で、入学試験は来年二月二六日を予定しています。また社会人や帰国子女や留学生は別の入試方法によることを考えています。詳細は認可の関係で十二月末にならないと発表できません。

人文学部は現在の英語英文科と一般教育の専任の教員が担当するほかに、日本でも有数の、それぞれの分野で第一人者といわれる多くの先生方に新しく専任や非常勤をお願いすることにしています。これもいずれお知らせいたしますが、かならずや大きな反響を呼ぶ教授陣になるはずです。

この人文学部が誕生すれば、すでに高い評価を得ている美術学部とともに、本学は二つの学部を有する、すぐれた複合大学となります。二十年間、主唱してきた「自由自治」の精神を、これからも堅持していくことはいうまでもありません。

今後さらに教学内容を充実することはもとより、新図書館、体育館、学生会館、新グラウンドなどを建設していくつもりです。これはたいへんな労苦であると、同時に大いなる希望であります。

美術学部と人文学部といえば、芸術と文化の一体化をあらわしており、これこそ今日、もっとも求められている大学であると確信いたします。この新しく生まれ変ろうとしている私たちの大学に、多くの意欲に満ちた若者が、そして年齢をこえて若々しい精神をもつ人々が、つどうことを願ってやみません。

（学長）

サバーティカル

野上　芳彦

昭和62年度は1年間、サバーティカルをいただき、研究に没入する機会に恵まれた。私が大学人となって最初の経験であるが、これは私の人生においても、また学究の徒としても、エポックメイキングなこととなった。現在私が学際的に最も関心を抱いていることといえば、「0歳」そして「高齢化社会」の問題である。いわば、人生の始まりと終わりの課題というようにも見えるが、学問的

■風光館と流渓館の設計趣旨

美術学部教授　上田　篤

二棟造
流渓館

京の町家は、間口が狭くて奥行が深いことから「ウナギの寝床」などと呼ばれる。流渓館は、こんな町家の特色を表現している。それは、キャンパスに流れる渓流に沿ってうねるウナギだ。このうねりは、山の地勢をそのまま表現している。山を削って四角な造成地を作って、その上に建てるのでなく、高床式にして山の自然な傾斜を生かそうとしたからだ。また町家のもとである民家の原型は、カミを祭るオモヤと日常生活するカマヤの二棟に分かれていたという。これが合体して二つの屋根の棟をもった建物を二棟造という。流渓館はこのような民家の祖型を表現した新しい「二棟造」でもある。「カミを祭るオモヤ」には、京都精華大学の主会場が鎮座している。

町家の集合体
風光館

町家は一見したところ、どれも同じ様な印象をうける。しかしよく観察すると、すこしずつその違いがみえる。風光館もそんな建築だ。約8,000㎡の床面積をもつ風光館に一つの屋根をかけて、普通のビル建築にすることもできたが、八の屋根をかけ、あたかも町家の集合体であるかの様にみせることを目論んだ。それぞれの棟は、配置も、地盤高も、また横縞の綾も少しずつ違う。さらに屋根と屋根のあいだのスリット空間には、通り庭のような入口を配し、四つの専攻コースのそれぞれのエントランスとした。

にはもっと大きな意味がある。すなわち、人間の存在とはもっとトータルなものだし、時代や社会の変化ももっとマクロ的な視点から評価すべきだと考えるからである。だから、学問や論理の世界も今までのように、ただ分析的・実証的・論理的な面だけに引きずられていてよいのか、という自省があった。このような視点から取り組んだのが、大学紀要『木野評論』（京都精華大学）に創刊号以来掲載している「新しい教育の視点」のテーマである。

このような経緯の中で、幾つかの疑問に遭遇することになった。そのひとつが「これからの教育のあり方」である。いわば、21世紀には今のような教育のあり方で、人類の幸せ、そして真に豊かな社会や人生が保障できるのかという命題である。何かが、どこかが間違っているというのはわかるのに、さて、それでは、となると、袋小路から一歩も踏み出すことができないのである。このような具体的な課題に、試行錯誤的ではあるがチャレンジはじめたのが、教育的取り組みの面では「福祉教育」、社会的取り組みの面では「明るい社会づくり運動」がある。井深大氏がその全国明社の会長でもある。

井深大氏とはご存知のように、一介の町工場から発足して世界企業SONYを育てあげられた世界的な実業家である。しかし、もう一面で井深大氏の教育への提言は「井深アピール」として日本よりむしろ世界で有名である。しかも、その提言の中には今まで学者であり、医師であり、専門家であったものたちすらが、見落としていた重要な示唆と警告が含まれているのである。井深氏自身、「心理学者にはこの重要な部分がわかっていないし、今の心理学には、間違いが多い。」「今の日本の出産・育児のやり方は、欧米に追随しすぎて大きな見落としと間違いをしているのではないか。」と指摘されている。

この発言は、学者の一人であり、心理学の研究者でもある私にとってはショッキングなことでもあった。それでは、前提条件にとらわれず、この課題について原点から徹底的に洗い直し、勉強の仕直しをやってみようと思い立った。そして1年間のサバーティカルをできるだけ有効に活用できるように、数年前から準備にかかり、井深大氏が自ら理事長として取り組まれている幼児開発協会を拠点にして研究活動に従事させていただいた。そしてその成果を著作として纏めさせていただくことにした。そのひとつが期間中に出版できた『井深アピールと0歳以前からの教育』—偉大なる赤ちゃん・そして胎児—（青也書店）という本である。詳しい内容はそれにゆずることにするが、大きな収穫であった。

今のように、社会がドラスティックに変化をし、科学が日進月歩している時代は、最先端の学者といえども、うっかりすると現実のほうがはるかに進んでしまっていることになる。事実、私たちが大学時代に学んだことの多くが既に修正を余儀なくされるのである。特に「0歳」すなわち誕生の前後の問題は、専門家の間でもここ5～6年前には全くわからなかったことが、今では日常的にテレビの画面で一般の人たちの眼にとまるのである。前記の本には、娘のお腹の中にいる誕生前の私の孫（胎児）の写真を掲載したが、こんなことは数年前ですら不可能なことであった。しかし、今から後の妊婦は、診察のたびにその映像写真を病院で貰えるのは珍しい出来事ではない。ハイテク機器の進歩によって、内視鏡や超短波診断機で胎児の様子がテレビの画面に写しだされる時代だから、羊水に浮かんだ赤ちゃんがあくびをしたり、指しゃぶりをしたり、おしっこをしたり、外の音に反応したりする姿に驚いてばかりはおれなくなってしまった。CTスキャンやコンピューターのシュミレーションでその心臓の動きや、脳のありさま、胎児の動きなどが現実に添ってもっとわかり易く眺められるようになってくると、今までわからなかったいろいろなものまでが見えはじめてきた。そして0歳（誕生）時の赤ちゃんが一番目覚めた状態にあるのが出産後1時間の間であることもわかってきた。この時間帯が子の母へのきずなが、そして子どもへの母親の愛情を確固たるものにするかけがえのない時間帯であるのも、解析されてきた。それが殆ど無駄にされていることは大変残念なことだ。このような事柄をビデオを使って講義すると学生たちの眼の色が違ってくる、そして輝いて見えるのである。

（美術学部教授）

「井深アピールと0歳以前からの教育」
野上芳彦著、井深大監修、幼児開発協会協力
青也書店　1500円

サンフランシスコ・アート・インスティテュートに学んで

武蔵　篤彦

十九のとき、アメリカへ絵の勉強をするために留学した。…というと聞こえはいいのですが、実際にはただ何となく絵が好きで、アメリカという響きが可能性に満ちあふれている気がしたからです。とりあえずワシントン大学に落ち着いたのですが、ずっと何をしたいかが見えず、ようやく四年生になって打ち込めそうなものがわかり始め、もっと深く大学院で学びたいと思い、サンフランシスコ・アート・インスティテュート（以下SFAIと略す）という設立百年以上の美術大学に進みました。その大学院を選ぶきっかけとなった話から始めます。

裸婦デッサンの授業でのことですが、僕の隣でドローイング台を立てて、制作に励んでいるSFAIからの転校生の作品に強く興味をひかれました。彼はモデルを真剣な眼差で見つめながら、一生懸命黒いビニール袋を引き裂いては、テープでカルトンに貼り重ねてゆくのです。ジョークでそんなことをしているとも思えないし、他の学生はまともなデッサンを描いている中で、彼だけが全々異なった課題をしているかの様でした。休憩時間に入り、その彼に何をしているのかと聞いたところ、彼は「自分のフィルターを通してオリジナルな手法でデッサンをしている」ということを、難解な言葉をいっぱい詰め込んで説明してくれました。

大ざっぱすぎる言いかたになるかもしれませんが、アメリカには二種類の美術教育機関があり、一方は総合大学の美術学部でアカデミックな性格を持ち、他方は美術専門大学でアバンギャルドな傾向にあると思われます。ワシントン大学が前者、そしてSFAIが後者に当ります。

今思えばアートを学ぶ姿勢として、基礎をしっかりそしてじっくりと組み立てるのも、視点や発想を変えてアプローチを試みるのも、同じぐらい大切なことでどちらが良いとかいう短絡的な判断はできませんが、当時の僕には、その彼の通っていたSFAIががぜん新鮮で未知の世界に感じられたのです。

ここで、SFAIのカリキュラムについて簡単に述べますと、単位をクリアするのにクリティークつまり学表会、そしてレビューと呼ばれる口頭試問の二つの関門があります。レビューは学期末に専攻教官全員に対して大学院生が一人ずつその学期に作った作品を全て集めて教室に展示し、その中で時間無制限で口頭試問を受けるのです。これはかなり精神的につらいもので、早く終っても二時間ぐらい、言葉とイメージが合致していないと判断された場合には翌日に持ち越されるケースも珍しくありません。テーマの選択は全く自由なのですが、それを言葉に置き換える作業をすると、必ずと言っていいほど非常にプライベートな部分に奥深く入っていくことになります。具体的な例を挙げますと、中国系アイルランド系アメリカ人のクラスメイトは、自分の複雑な民族的背景について深く考えます。またホモセクシュアルであるクラスメイトは、いろいろあった少年期の体験をあえて思い起こす努力をします。つまり自己のアイデンティティーを模索するのです。そしてその原風景を対峙すべき作品の核とします。

何故これほど執拗に言葉とイメージの関わりを追求したかというのには、その時代、一九七〇年代後半の美術の流れに深く関係しているものと思われます。六〇年代には、ポップ、ミニマル、ランドアートなどのムーヴメントが、重なり合いながら進行してそれぞれの隆盛を極めた時代でしたが、七〇年代はというと、まるでそれが六〇年代に出尽くしてしまったかの様で、七〇年代の終りにシュナーベルに代表されるニューペインティングの出現まで、静かな冬眠のディケイドでした。そして僕がサンフランシスコで過ごした七〇年代の後半は、ミニマルとコンセプチュアルが時代の選択を通過した形で生き残り、ヴィトー・アコンチ、ソル・ルウィット、ブルース・ノーマン等が脚光を浴び、パフォーマンスという言葉がまだ耳

新しかったその頃は、クリス・バーデンやローリー・アンダーソンがアートシーンを賑わせていました。何をつくるかを言語化する課題がカリキュラムに組み入れられたのは、そんな美術の時代背景のせいでしょう。

僕にとっては結構つらかったSFAIのレビューでしたが、振り返って見ればその体験が、現在のものをつくり続けている原動力になっていることは確かです。十年も経てば美術の流れも、時代背景もかなり違ってきますし、そのカリキュラムを、そのままの形で行なうことが望ましいとは思いませんが、学生たちには何らかの形で、何をつくるのか、何故つくるのかを深く考えて欲しいし、ものをつくること、そしてつくり続けることの意味を自分なりに把握して欲しいと思っています。

（美術学部講師・版画担当）

ロンドン見聞記

吉田　一雄

この雑筆は昭和一一（一九三六）年二月から七月まで、ロンドンに滞在していたときに見聞したものを、昭和一四（一九三九）年頃に書き記したものである。今日、ロンドンを訪れる人があったら、どんなに変っているか、教えていただきたいと思って、反古にもかえりみず、あえて活字にしていただいたのである。

(1) Keats の跡を訪れた人達

話は古いが、一九三六年の初夏、其の頃トロント大学の学生であった中島武夫君（現在はメソヂスト牧師）と一緒に Keats の跡を訪れた事があった。

ロンドンの町を歩く時には大体 "New Rambles" (Homeland association Ltd, 37 & 38 Maiden Lane, Covent Garden, London W.C. 2) か "London" (Ward Lock & Co., Ltd, Warwick House, Salisbury Square, London E.C. 4) かを手にしていたのだが、今、前者が手元に無いので後者に依ると、

Keats....lived at *Lawn Bank*, at the foot of Keats Grove. Lawn Bank, in the garden of which the *Ode to the Nightingale* was written....is now maintained as a Keats Memorial and Museum. The Keats House is open (free) on Mondays, Wednesdays and Saturdays....(p.267)（キーツはキーツ・グロウヴの麓、ローン・バンクに住んでいた。「夜鶯に寄す」を其の庭で書いたと言うローン・バンクはキーツの記念陳列館として保存されている）云々とある。Keats Grove は言うまでもなく Hampstead Heath にある。

その時、勉強していなかった "New Rambles" には、たしか向って右半分の部屋には Brawne、左半分前部屋には Brown、同後部屋には Keats が住んでいたなどと記してあったと思うが、その Browne の後方の部屋に例の訪問者の為の記念サイン帳には何故か心惹かれた。時のサイン帖に記されてあった日本人名は次の通り。

石黒覚太郎	(Kobe)
Goto Shigeru	(大阪商大)
GOTO Miyako	(Tokyo)
Ckikanari	(岡山)
植田敏郎	(広島)

自分の記憶が正しいとすると、上記の様に書き方は様々であった。此処で一つ御願い申したいのは（別にキーツの家庭訪問者聯盟を作るわけではないが）、一九三六年以後の日本人訪問者名である。

(2) The Globe と Dr. Johnson

日本ではあまり知られていない本かも知れないが、自分に取っては絶えず良き友であった "New Ranbles" を片手に、テムズ南岸 Southwark の近辺を、さまようた事がある。もっとも目的は The Bear Garden, The Rose Theatre, The Swan Theatre, The Globe Theatre などの跡を訪ふにあった。

今、The Globe に就いて述べると、其れが存在していたと覚しき所には Barclay, Perkins & Co. という大きな Brewery が在って、此の Brewery の北側の壁に記念の tablet が出してある。

此の Brewery の地理を詳しく言うと、テムズの南岸にあり、南通りは Southwark St. と Castle St., 西通りは Southwark Bridge Rd., 北及び東通りは Park St. である。上記 tablet は、つまり、此の北側の Park St. に面した壁に出ている訳である。

The Globe の北向いに The Rose, The Rose の西向い (Southwark Bridge Rd. を越えて) に The Bear が在ったらしい。The Rose の跡は家でも建てるのか、囲いがしてあるのみで tablet などは見当らぬ。

さて、又 The Globe に戻ると、外部から tablet を見つめる許りでは勿論、物足らぬから Brewery の中へつかつかと入って行った。と、いきなり「アサヒ・ビールの会社から来たのか?」と尋ねられた。身に覚えのない話。「いいや、そんな者ではない。」「では、何しに来た?」「The Globe の site を見物に来た。」「site? 今は boiler が占領している。tablet なら外の壁にある。」という始末。「しかし Dr. Johnson の部屋なら案内しよう。」と言う。うつけ者の自分は Dr. Johnson が Brewery と何の関係があると言うのか?と大あわてにあわて乍ら早速 "New Rambles" を調べてみると Halsey は Thrale を知り、Thrale は Johnson を知り、Johnson は遂に此の Brewery の executor に成り、後、Quaker である Barclay が此を買取り、Perkins がその manager に成ったと記してある。

そこで、とりあえず boiler の南側にある建物の二階に連れて行かれたが、その処には未完の Johnson Museum と Johnson's Room とが並んでいた。案内人は自分を無理に Johnson's Room にあった、大きな皮張りの椅子に腰かけさせて曰く「それが Dr. Johnson の常に使っていた椅子である。」と。

斉藤氏の「英米文学辞典」にも Johnson の項に、彼が「Mrs. Thrale 及び其の夫……と親しくなったのは一七六四年」云々と記してある程、さようにJohnson と Brewery との関係は有名な事らしい。

時に、もう Dr. Johnson の Museum は完成したかしら?

尚、The Swan は Holland St. に在ったと言うが、それは Park St. を西へ行くと (Summer St. になるが) 始めて交錯する通りである。

附記；"New Rambles" の発行所は下記の通り。

Homeland association Ltd, 37 & 38
Maiden Lane, Covent Garden, London

内容は数名が分担して書いている、その中の一人 Basil Hodgson に同居している頃、自分は、すすめられて手にしたのが縁である。

（元英語英文科教授）

教職員の消息

佐々木　弘氏　(57)　日本画教授
武蔵　篤彦氏　(35)　版画講師
佐藤　敏氏　(51)　陶芸教授
難波　直彦氏　(32)　VCD講師
高松　伸氏　(39)　ULD助教授
田中　充子氏　(41)　ULD講師
片木　篤氏　(33)　ULD講師
鳥羽　美花氏　(26)　TD講師
以上63・4・1付新任

林　与作氏　(76)　用務員
62・9・30付退職
大江　芳雄氏　(77)　用務員
63・9・30付退職
福井　勇氏　(80)　美術学部名誉教授・元洋画教授
63・9・14　逝去されました。
心からご冥福をお祈り申しあげます。

V.C.D. 3年　江戸裕樹

海外研修プログラムの出来事

原田　弘

一九八八年の京都精華大学主催海外研修プログラムは、7月15日から30日間アメリカのカリフォルニア州ペンローモンドとワシントン州シアトルで行われた。参加した学生は20名。大学から専任教員が2名同行した。現地では、主に6名のアメリカ人コーディネーターとその他何人かのアシスタントスタッフが、2名の日本人教員と共にプログラムの進行にあたった。内容は上記2ケ所をベースキャンプにして、非常に多くの場所へ移動しながら、いろいろな人に出会い、現地でのさまざまな体験を通じてアメリカの生の姿を見るという徹底した現地主義にもとづいた体験学習のプログラムである。

サンフランシスコで2日間過したあと、ペンローモンド（サンフランシスコの南約一〇〇km、サンタクルズ市近くの小さな町）では、高さが一〇〇メートル近くもあるレッドウッドという巨大な木がぎっしりと立ち並んでいる林の中の山小屋で1週間滞在した。訪れたところは、サリナスのロデオショウ、'ranch' と呼ばれる広大な農場など。その他親子2代の 'logger'（きこり）とも会い、実際に（レッドウッドの）木に登って木を切るところを見せてもらい、彼らからレッドウッドの生態について話を聞いた。何千年という歴史をもつレッドウッドの林の中で、自然の雄大さに感動した。

シアトルでの3週間は、2名ずつ11のアメリカ人家庭に分れてホームステイをした。ホストファミリーは、人種、職業、家族構成、などの点で互いに異なった人達がアメリカ人コーデネーターによって選ばれていた。学生たちは、それぞれの家庭で英語による悪戦苦闘の中で、アメリカ人の子供の育て方、離婚問題、人種問題、アメリカ人の金銭感覚、経済状態などいろいろと学習したようだ。

第一週は主にプログラムセンターで、アメリカの歴史、アメリカ人のものの考え方、インタビューの仕方、英語のパラグラフの構造など、基本的な事がらについてレクチャーが行われ、第2週は、2ケ所のキャンプ場でのテント生活。これは学生にとっては、印象に強く残った exciting なものだった。

プログラム期間中大きな事故もなく、全員無事日本に帰って来たが、キャンプの時に、レニア山のキャンプ場からウェナチのキャンプ場への移動中、我々の3台のバンのうち1台のバンが引っぱっていたトレーラーのタイヤが、高速道路上で火をふくという事故があった。

やむなく我々はバン2台に分乗しウェナチへ向かい、残りの1台に荷物をつめ込んで、トレーラーを修繕するために、Dr. Mark とDebが修繕工場へ向かった。ウェナチに着いた我々は、2日間シャワーなしで過した休のよごれを落とし、夕食のビーフステーキを楽しみにしながら、Dr. Mark とDebの到着をのんびり待っていた。予定ではテントを最初に立てて、すぐ食事の準備にとりかかるはずだったが、テント、スリーピングバッグ、食料、食器、ランプなど、衣服以外ののとんどの荷物は、Dr. Mark の運転するバンにのっているので、バンが到着するのを待つ以外にすることがなかった。

当地は緯度が高いので、夜は9時頃まで明るい。2人からの連絡もなく長い昼が終った。2台のバンのヘッドランプの前に全員が身を寄せて、我々は残りもののパンと、コンロの火力が弱くてどろどろになったマカロニを食べた。エネルギーのかたまりのような元気な学生もさすがに声もなく、スタッフもただだまって、弱々しくほほえんでいる。

おどろくべき数の流れ星が飛びかう、満天の星空の下、ありったけの衣服を身にまとい、文字通り野宿の覚悟を決めていた我々に、ふたつのあかりが近づいて来た。真夜中をとっくに過ぎていた。感激と興奮の中で2人を向えた学生たちの心はひとつになった。彼らは互いに相手の立場を考えながら自分の行動をする一人一人に大きく変った。

第3週は、2つのグループに分れて、（それぞれ2人の）アメリカ人に学生たちがインタビューをした。4人のアメリカ人の顔ぶれは、シアトルの黒人市会議員、ホームレスピープルの問題に取り組んでいる人、東洋系アメリカ人援助の組織活動をしているフィリピン系アメリカ人2人である。実際には、学生はインタビューをするというより、相手の話す英語を理解するだけで勢いっぱいだったが、少し通訳の助けを借りて、自分たちの視点からいろいろおもしろい質問をしていた。

30日間、プログラムはほとんど日本語による通訳なしで行われた。学生たちは時には英語が理解できないまま、もどかしさを感じたようだが、このプログラムが彼らにとって、これからの人生に大きな motivation となったことはまちがいない。

（英語英文科講師）

私にとっての中国留学

横本めぐみ（英語英文科　一九八六年度生）

私は京都精華大学短期大学部に86年度入学、現在休学して中国の北京語言学院という学校で中国語の勉強をしている。誰もが私の経歴を聞くと『どうして？』と不思議がる。むろん私は英語は好きだったが、英語をやっている人は沢山いる、だったら自分は他の外国語を学んでも面白いだろうと思い、中国にも関心があったため、中国語を独学で始めた。

そして一年後、私は留学に踏みきった。

北京での最初の一年は北京師範大学で中国語を学んだ。中国ではホームステイの制度はなく留学生は校内の専用の寮に住む。

中国の大学は日本の大学と、いろんな面で異なる。まず中国人学生は例え近くに家があっても寮生活をしている。先生もほとんど大学内に住んでいて、大学が一つの生活区となっている。一部屋に二人の留学生とは違い、中国人学生は一部屋に七、八人収容されている、といった感じだ。その上彼らの勉強に対する姿勢というものには敬服させられる。個人の勉強机もないので、睡眠、食事、授業以外は、教室へ行って勉強する。彼らにとって勉強は生活の一部、いやそれ以上のものになっているようだ。

環境もよくアットホームな雰囲気で授業が進められた師範大に対し、二年目から移った語言学院はカリキュラムも充実し私は大変満足している。この学校のテストは厳しく、期末テストでは、すでに中間で出た所が再び範囲になったりもし、二冊の教科書を復習するのはさすがに骨が折れた。

この学校はとにかく国際的で恐らく全世界の人々が集まるオリンピック選手村のような所、と言っていいだろう。日本にいて、こんなに多く世界の人達と生活する機会はまず無に等しいし、文化の違いもわかり、貴重な体験ではある。しかし、夏の夜になると、アフリカ人などが外で騒ぎ出し、夜中の二時三時と一向におかまいなし。うるさくて寝つけないわ、腹は立つわで睡眠不足になったこともある。習慣の違いは怖しいものだ。

とにかく外国人留学生の寮にいると、自分から意識的に外へ出るようにしないと、どうしても外人だけの世界に陥ってしまう。そこで私は『一日一度必ず授業以外に中国人と接すること』というノルマを立ててきた。

幸い私は中国人の友人達に恵まれ、中国の文化、生活、考え方等、多くを学ぶことができ、その上教科書以外の生きた会話や北京の方言等も知ることができた。

北京に来て以来、私は暇さえあれば北京中を歩き廻った。北京を歩こうと思えばとてもじゃないが日本で着るようなきれいな服装はしてられない。すぐ砂ぼこりなどで汚れてしまうのだ。この砂ぼこりが海を越えてはるばる日本へ渡り、いわゆる黄砂現象を巻き起こしているのだ。

近頃の北京は建設ラッシュで外国と合弁のホテルやビルが建ち並ぶ一方、胡同（フートン）と言う昔ながらの庶民の生活がいきづいている貴重な横丁が残っている。私は特にその胡同を歩くのが好きだ。その上、そこは慣れてしまえば大通りを通るよりずっと近道にもなり、一般庶民の生活をうかがうこともできるし一石二鳥である。

普通、中国の公共トイレは、コンクリートに穴があいているだけで戸やしきりは一切ない。よく若い女の子からお年寄まで、トイレの中で井戸端会議ならぬ便所端会議をしているのに出会う。そのトイレの中で、ある八十を過ぎた老婦人と出会った。彼女と私は、ひょんなことから世間話をしていたが「あんたはこの辺のコかい？」と聞かれ、私は日本人だと言うと目をまん丸にして「日本人に見えない。」と驚いている。なんで日本人がここにいるのかと問われ、留学で中国語の勉強に来ていると答えると、「え？日本人がどうして中国語を…。」とまだ信じられない様子である。なんでもこのおばあさんは今はしゃべれないが戦争中、日本語を少ししゃべってたそうだ。日本とは八年間戦争をしていたため、彼女のように以前日本語ができたという老人はかなりいるようである。とても懐しそうに声を上げて北京語でまくしたてる彼女。そのまま場所柄も考えず、何と二十分もしゃべってしまったものである。

"西大后"の映画でも出てきた円明園

現在、私のいる学校では日本人も相当な数を占めているわけだが、全く勉強する気力を失った者から毎日猛勉強をしている人と、様々である。特に若い日本人留学生にみられる留学生活から脱落した一部の人達は、私はお目にかかった事はないが、噂を耳にする度、同じ日本人留学生として恥ずかしかった。

この中国に限らないと思うが留学は本人の努力次第で決まる、と私は思っている。

精華大学の一学生として、休学中に得た貴重な体験を生かし、今後増々努力する事がこれからの私の課題でもある。

私達のあんぱんてりぶる

秋、栗やぎんなん、いちじくが大学に実る季節が訪れると、ごろごろと昨年のあんぱんてりぶるのスタッフが顔を寄せ会う。毎年引き継ぐため、新スタッフ獲得は重要な課題である。又私達は、スタッフを色々な所から集め、共に仕事をし、酒をのんで唄って騒ぐ事にひとつの喜びを感じる。

あんぱんてりぶるは、学生、卒業生、教職員、その他精華大学につながりのある人なら誰でも出品が可能で審査、受賞を一切やらない展覧会である。かつては美術展（精美展）として存在していた為、英文科の人は、自分の参加できない、どこか手の届かぬ寂しさに駆られたのではないかと思うが、二年前より新しく誕生したあんぱんてりぶるは、以前の枠を取り払い、絵や作品だけに留まらず、創作・研究・作文・趣味等の発表の場となりうる。つまり形式は自由であることを知ってもらいたい。あんぱんてりぶるの名の由来は古くは一八八四年のフランス・サロン・アンデパンダンまで逆のぼる。日本では、日本美術会が主催した日本アンデパンダン展がはじまりである。〝てりぶる〟は恐るべき子供達という意味を含め双方が合体しあんぱんてりぶるとなった。87年度から英文科スタッフも加わり、88年度では一層多くの英文科の参加も呼びかけてゆこうと意気込んでいる。私達は、あんぱんてりぶるが多様なコミュニケーションの場となることを心から望み、どんな形であれ〝自己主張〟の出来る場としたい。年に何度もあるチャンスではないので、大いに利用していただきたい。

毎年、卒業生の出展もわずかながらある。もっと多くの先輩方の参加を望むと同時に、学生との交流の場をもてたら良いと考えているが、今のところ実現できていない。88年度搬入〆切りは十月三十一日。春秋館へ。

87年度は他校との交流もと、宝塚造形芸術大学と合同企画でデッサン部門の巡回展を行い、又、普段眠っている、精華大学所蔵作品の一つであるパリ・コミューン時代の風刺マンガ展を企画した。そして私達は回を重ねるごとに当然のことながら変化と発展を目指す。

活動資金集めに走りまわる広告取り、寒い中朝まで書いた大立て看板、〆切ぎりぎりのパニック状態のポスターとパンフレット、当日の眠い監視、複雑で難しくもある人間関係……全てが終って黒字がでれば、万々歳。赤字だってなんのその。精華大の山から薪を拾ってきて、学生課の目を掠めてぐるっと囲んだ真中で火を燃やし、やみなべコンパ。お酒のんでうたを唄えば、何もかも楽しくなるものだ。くらくら頭がまわりながら〝これぞ大学生活〟とアホになりながら、酔いしれるのがあんぱんてりぶる。

おわってみて、単位が消えかけてるのに気付くのもあんぱんてりぶる。

（実行委員、英語英文科八七年度生　高井　歩）

88年度あんぱんてりぶる
期間　11月1日～3日
場所　春秋館
搬入　10月31日
搬出　11月4日

あんぱんてりぶる'87秋展より
私の絵画史

今年も学内で秋展が催しされる時が来た。元々絵が好きで余暇を見てスケッチに出かけ健康のためにも風景画を愉しんできました。

若き頃、学校を卒業してすぐ軍隊に召され、七年間の青春時代を戦争に参加し、北支那方面、大東亜戦争で南方フィリピン・タイ・ビルマに転戦。終戦後は英軍の指揮下タイ・ビルマ国境付近で労役に服し、一ケ年後に帰国した。想へばよく生きて帰られたものと今以て感慨無量である。

軍隊時代に上司である部隊長より、占領地区から敵状方面の風景を画くように命ぜられ絵画の材料（水彩絵具）を求めに遠く北京まで出張して手に入れたものだった。以後、私の私物として大切に所持して居た。部隊長に絵を渡し地区名を記入されて部隊の呼名を統一して作戦行動に寄与し、下手な絵を画く事で随分と得をしたように思える。

歳を取って又絵画を愉しんで居り、時に油絵も画いて居りますが、自然を忠実に観察する写実的な画風から云えば、私は水彩画の方が好きで、これからも画き続けて行きたく思います。

岡　貞男（本学の夜警さん。毎年本展に出展中）

ラグビー部創部20周年記念式もたれる

去る九月二五日、ホテルニュー京都でラグビー部創部二十周年の記念祝賀パーティが催されました。一九六八年度入学の短大一期生から、一九八八年入学の現部員まで一二〇名程のラガーメン、マネージャーが一同に集い、熱い友情を交換することができました。

村上泰造部長の音頭による乾杯で始まったパーティは、笠原芳光学長が二十歳の青春にラグビーの美しさをうたった「冬日宙（ふゆびらゆう）　いまスクラムの脚（あし）　撓（たわ）む」という俳句も披露され、また、各学年毎のメンバー紹介では数々のエピソードが語られるに及んで、どの顔も、楽しく、かつ思い出ふかい学生時代の顔にもどっていました。

ひとくちに二十年といっても、赤子が大人に成育するに必要な時間の経過です。この二十周年を記念して、OB会からは現役チームにビデオカメラ一式がプレゼントされ、相川寿浩主将からは「伝統を受け継ぐだけでなく、さらに新しい歴史を創るべく頑張ります」との決意が表明された後、全員肩を組み、「それが青春」をうたい、またの日の再会を約束して式を終えました。

最後になりましたが、式にご参加いただきました笠原学長、中平学生部長のほか、諸先生、職員の方々に、そしてお祝いや、祝電をいただきました多くの方々に御礼申しあげます。

一九八八年　九月二十九日

京都精華大学ラグビー部
OB会　　幹事会

追記

本誌でも呼びかけがありますが、難病と闘っている、本学卒業生　森野春樹氏のご子息睦也君に対して、ラグビー部OB会としても、できる限りの協力をしたい旨、当日呼びかけをいたしましたところ、当日、カンパ分として七七、八〇一円のご協力をいただきました。病魔と闘う幼い睦也君への励ましになれば幸いです。ご協力ありがとうございました。

卒業生からの便り

精華が、夏休みに入る頭の一週間で、デザイン教職課程の講座を教えるのが、ここ5年程の定例スケジュールになっています。

10年程以前、精華に学んでいた私が、全く同じ場所で、教えるというのに照れるのですが…。

今年から、校舎も新しくなって〝過去を振り切って〟少し気が楽になりました。（出来ることなら、教室にもクーラーが欲しかった）

一週間でデザイン（特に私の場合はグラフィックですが）の事にふれてもらおうと努力するのですが、これが、なかなか上手にできないのです。

実際に、ビジネスとして行われているデザインと、ベーシックな、学問的デザインも全く異っています。ジャンル的にもグラフィックだから平面だけやってる、と言うのは少くて、立体も映像もイベントもと現場では、広がってゆくわけです。

まして、絵画や立体という純粋アートに対して、デザインは、実用性、経済性、汎用性が不可欠ですから…。そんなことを、中途半端にモゴモゴ話しながら、課題を3つ程、制作していただくと、一週間が終ってしまいます。

生徒のみなさんは、暑くて、しんどかった事しか、記憶に残ってないかと、終了時に、いつも不安です。

世間に出られた時に、少しでもナルホドと思ってもらえることがあれば、幸いであります。

池本勝宏（美術科デザイン専攻一九七三年度生、現在美術学部V・C・D非常勤）

「李宗樹、釈放される」

在日韓国人政治犯として、韓国で服役中の李宗樹氏（本学英語英文科七七年度生）が釈放されました。彼は八〇年三月、ソウルへ渡り、翌年高麗大学国文科に入学。留学中の八二年十一月、国家保安法違反容疑で逮捕され、無罪を主張しましたが、懲役十年の刑が確定し服役していました。帰国は十月下旬の予定。

〈卒業生名簿整理委員会からのお願い〉

●皆さんのご協力により名簿整理はかなり出来てきましたが、再度以下のことをお願いします。

①先に「同窓会」予告ハガキを発送いたしましたが、「転居先不明」、「あて所に尋ねあたらず」、「住居表示変更」等の理由により返送されたハガキがかなり有ります（別添「不明者リスト」の通り）。ご存知の方はご連絡下さい。

②将来、氏名、住所を変更された時は必ず大学の方にもご連絡下さるようお願い致します。

●今回の「卒業者名簿」は入学時の学生名簿を基礎にしていますので、中途退学者も含まれておりますが、記載を望まれない方はその旨ご連絡下さい。

●今後大学へご連絡頂く場合は、必ず学籍番号を忘れないようにお願い致します。

追悼

68P 5　伊藤　克己　様
69P 10　平野　咲子　様
70E 163　水木　詠子　様
71D 21　小沢　善道　様
73P 7　糸田　茂　様
74E 234　長江　和江　様
75E 176　柴田　文代　様
76E 97　加藤　順子　様
78E 41　井上　了　様

謹んでお悔み申し上げます。

ともや君にご支援を！

京都精華大学に在学中の皆様、又、卒業された皆様、私たちは、'72年度生絵画コースを卒業したものです。実は、私たちの同期の、森野春樹君の2男　睦也君（3歳）は、「先天性胆道閉鎖症」という病気で生まれつき肝臓と十二指腸との間にある胆道が、何等かの原因で無いか、或いは、つまっている病気だそうです。今までに、京都大学医学部付属病院で5回にわたる大手術を受けていますが、現在の医学では、肝臓移植しか助かる道がないそうです。しかも、年内に移植手術をしなければ、命にかかわるといった切迫した状況です。しかし、皆様も御存じのように日本では、移植手術ができないことから、外国における治療しかなく、又、望みをかけられていましたが、このほど「西ドイツ」での手術ができる見通しがつきました。しかし、その治療費・滞在費などに、約2000万円の費用がかかり、とりあえずご家族・ご親戚で約700万円を捻出されとりあえず西ドイツに出発されましたが、あと1300万円余りのお金が不足しており、私たちの力だけではどうすることもできず、そこで、多くのご理解ある皆様のご支援によらなければならないのが実情であります。私たちは、睦也君の1日も早い手術と快復を願い、又、大きなおなかもペチャンコにもどり、骨も太くなり、赤いほっぺで元気に走りまわれることを祈りながら、ただ皆様をはじめ、ご家族、また職場・地域などにおいて一人でも多くの方々のご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

昭和63年9月
'72年度生　絵画コース一同

呼びかけ人

関口高夫
〒415　静岡県下田市東本郷1-5-1
Tel 0558-2-1068（7:00PMまで）

松本清茂
〒664　伊丹市北本町3丁目106松応荘
Tel 0727-78-1914

木野村みえこ（菅野）
〒581　八尾市若林町3-124八尾南ハウスB-307
Tel 0729-49-5431

萩原里栄子（瀬木）
〒606　京都市左京区岩倉長谷町616-2
Tel 075-791-3600

米谷聖司
〒678-02　兵庫県赤穂市さつき町1番地の4
Tel 07914-5-2113

（募金にご協力下さい）募金の振込先

1、滋賀銀行彦根支店　普通預金口座番号108497
2、彦根信用金庫本店　普通預金口座番号483990
3、滋賀県労働金庫彦根支店　普通預金口座番号008482
4、彦根市農業協同組合中央支所　普通預金口座番号0257274

問い合わせ先　電話番号　0749-22-2734
〒522　彦根市野瀬町279-1番地　睦也（むつや）くんを救う会事務局

睦也くんを救う会代表　大脇広吉
睦也くんを救う会代表　大脇広吉
睦也くんを救う会代表　大脇広吉
睦也くんを救う会代表　大脇広吉

皆様のお力を貸して下さい

今、テレビ、新聞紙上で臓器移植が話題になっておりますが、私の最愛の息子も実はもう移植しか生きていく方法がないという悲しい病気です。病名は「先天性胆道閉鎖症」、この病気は肝臓と十二指腸との間にある胆道が生まれつき何等かの原因で無いか或いは、つまっている病気です。この胆道がつまっていれば、胆汁は流れず肝臓の中にたまってしまい、便は白くなり肝細胞は崩れ、またそれが血液の中に回って黄だんとなってあらわれ、やがて肝硬変となり死亡してしまうという現代の医学ではまだ完治の方法が発見されていない大変な病気です。私の息子「睦也」（トモヤ）も生まれつき胆道がつまっていました。それも肝臓の中でつまっているため、手術するにも肉眼ではつまっている部分が見えないため、まず胆道を切り取り、たぶんこの辺だろうという手術にあたる先生の勘でつまっているだろうと思われる肝門部を削りとり胆道のかわりに十二指腸をつけるという手術を生後84日目でしました。術後「二週間たっても胆汁が流れなかったら死ぬだけです」と主治医の先生から言われ睦也は二週間たっても、どうとう少しも流れませんでした。毎日、真っ白い便が出ていました。でも先生から「もう一度チャンスを下さい」と言われ、一ケ月後再手術をしました。手術前日の絶飲食24時間がとてもかわいそうでおなかをすかせて泣き叫ぶ小さな我が子を一晩中抱いていたことを今でもハッキリと覚えています。再手術の結果、少しずつですが胆汁が腸のほうへ流れ出し便にも少しずつ黄色い色がつきはじめました。信じられませんでした。血中ビリルビン（全身にまわっている胆汁）も少しずつ下がり始めました。が、それも長くは続きませんでした。手術で削り取った部分がかさぶた状に肉がもり上がり道をふさいでしまうのです。便がまた、どんどん白くなっていく時の絶望感。オシッコは真っ黄色、それ以上に紅茶のような色の時もあります。そして生後8ケ月目の再々手術。これもあまりおもわしくなく京大病院で（おそらく胆道閉鎖の子供では睦也が初めてだと思われますが）グルカゴンという薬を点滴で毎日24時間投与しました。「肝臓よ働け、働け」と肝臓にムチ打つ薬だそうで、確かにその後一週間くらいで黄色っぽい便が出始めました。副作用もかなりありましたが（脱毛、はげしい吐き気、おう吐、食欲不振）、もうだめだとあきらめていただけに、黄色い便を見て、うれしさのあまり涙がとまりませんでした。でも、細い手足に点滴の針を刺すのはとてもかわいそうで、それも2、3日で血管がつまり刺しかえなくてはなりません。血管がもろく、つぶれてしまい、もう針を刺すところもなくなり、マタから点滴をしたこともあります。それから約一年かけて少しずつグルカゴンの量を薄くし、肝臓に負担をかけないようにし一週間に一度2ミリの量になりました。しかし、その間にも少しずつ肝硬変が進行していたのです。「もう肝臓移植しか生きる道はない」と診断されその移植が日本では出来ない以上、このまま病院にいるよりは少しでも元気なうちに家族と一緒に過ごさせてあげたらどうですか、と言われ一歳8ケ月目でやっと家に帰ってきました。でも黄色っぽかった便は少しずつ白っぽくなり黄だんは強くなりわずか2ケ月後にはまた入院、そして4度目の手術。さらに一ケ月後には5度目の手術。術後小さな身体は鼻にはチューブが入れられ何本もの点滴、お腹にはチューブがまた何本も入れられ泣く元気さえなくなり、このまま衰弱して死んでしまうのでは……と思ったこともありました。せまいベットでの長い間寝たままの生活の上、カルシウムが体内に吸収されず、骨も細くてもろく、お腹はカエルのように大きくオシリは小さく手足もとても細いため、体をささえることが出来ず、2歳になっても一人で立つことも出来ませんでした。毎日毎日、痛い目にあい、自由がないためかそのうちノイローゼ気味になり、突然全身に水をあびたように汗をかきひきつけをおこして泣き叫ぶことが多くなってきたのです。これではいけないと先生からも「もう一度、家でゆっくり生活をさせてあげてはどうですか」と言われ、去年4月に帰ってきました。家に帰ってからは、うそのようにひきつけも治り、久しぶりに笑顔が戻りました。2歳4ケ月の頃です。一人で立てるようになり、やがてヨタヨタと歩きだしたのです。睦也が少くなんてこと思ってもみなかったことなので、うれしくてうれしくて涙が出ました。この病気の最年長は多分現在27歳、1歳の誕生日を迎えられることが出来るのは悲しいことに約半分なのです。睦也は今3歳4ケ月。家に帰ってきてから1年余りたちました。少しずつ体力はなくなり黄だんの値は高く肝硬変は進行していきます。肝硬変が進むと大人でも全身がとてもだるくつらいそうです。睦也くらいの黄だんが大人であれば3ケ月ほどで死んでしまうと言われるほどなのです。睦也もとても体がだるいと思います。最近では、ほとんど歩こうとしなくなりました。お腹はとても苦しいことと思います。なのに睦也は毎日私たちに笑顔を見せてくれます。小さな体で本当によくがんばっています。限られた生命なら、私もできるだけ笑顔で楽しい思い出をいっぱい残そうとがんばっています。初めての手術の時は私も泣いてばかりの毎日でした。でも睦也が小さな体で一生懸命生きようとしているのを見て、私も負けずにがんばらなくては……と思うようになったのです。生命の尊さ、生きようとすることの尊さ、病気の子供を持つ家族の人達や他人を思いやる心までも、こんな小さな我が子から学んだような気がします。もちろん今でも胆道閉鎖症で生まれてきたことはとても残念で悲しいです。残された道はただひとつ、肝臓移植のみです。日本ではまだまだ脳死という厚いカベがあり、たとえそれが死と認められるようになったとしても、日本では6歳以下の子供には移植をしてはいけないという決まりがあるためどうにもなりません。とても6歳までは生きられません。日本でも胆道閉鎖症の子供の手術が出来る先生はごくわずかだと聞いております。幸いにも睦也は良い先生に恵まれ、ここまで生きてくることが出来ました。その先生もアメリカで肝臓移植の勉強をされ、実際に先生ご自身も移植を手掛けてこられ、移植さえすれば本当に元気になるということをご自身の目で見てこられただけに、日本で出来ないのはとても残念だと言っておられました。外国ではどんどん移植手術が行われており日本からも何人も手術を受けに行っています。元気になって帰ってきた子供たちの姿をテレビ、新聞で見てうらやましく思う毎日です。成功は非常に難しいと言われる臓器移植手術。まして睦也は5回もの大手術をしているため、ゆ着がはげしく大変難しいと思います。たとえ成功してもその後の拒絶反応、感染症などの問題はたくさんありますが、それでも成功すれば大きなお腹はペチャンコにもどり、骨も太くなり元気に走りまわるようになれるのです。そのためには西ドイツで約2000万円ほどの費用が必要だというのです。しかし私達の費用だけではとても足りる額ではありません。そこで勝手なお願いだと思いますが、皆様の力を貸して下さい。睦也を助けて下さい。睦也にはもう時間がありません。今より病状が悪化すると、手術のための体力がなくなり、どとても移植手術には耐えられない状態になってしまいます。毎日少しずつ元気がなくなっていく我が子を見ているのはとてもつらいです。真っ黄色の目、全身黄色っぽい肌、細い手足に大人より大きなお腹、真っ白い便。今は一日一日を大切になんとか元気で生きていてほしいと祈る気持ちでいっぱいです。ぜひ皆様のお力を貸して下さい。よろしくお願いします。一日一日を精一杯生き抜いている睦也をどうか助けて下さい。お願いします。

森野　春樹

〒521-11　滋賀県彦根市金沢町977
森野　春樹
洋子
Tel（0749）43-4209

彦根の3歳坊やに肝移植を

—海外手術で命を救え—

重い肝臓障害の「先天性胆道閉鎖症」のため、肝臓の移植しか助かる道はないと診断された彦根市内の三歳六カ月の男児が、近く西ドイツの大学で移植手術を受けることになった。しかし、治療費、滞在費など含めて約二千万円もの費用が必要なため、地元自治会や父親の勤務先・彦根市の職員互助会、労組などが「救う会」を結成。五日から地域、職場ぐるみの募金活動を始めた。

この男の子は彦根市金沢町、市清掃センター管理課職員、森野春樹さん（三四）の二男睦也（ともや）ちゃん。睦也ちゃんは、生後間もなく真っ白い便が出たため市内の病院でみてもらったところ先天性胆道閉鎖症と診断された。やがて肝硬変となって死亡するもので十万人に一人の難病。

睦也ちゃんに肝臓移植手術の道が開けたのは先月、京大病院に入院したとき、広島での学会に招かれ来日中の西独・ハノーバー大学の肝臓移植の権威、リンデ博士が共同研究を進めている京大病院を訪れ、睦也ちゃんを診察した際、西独での移植手術を約束して帰国。同博士から連絡が入り次第、九月早々に睦也ちゃんは西独へ出発する予定。

順調にいって二カ月半—三カ月滞在することになり、手術費用も含め約二千万円の経費が必要。このため、森野さん一家の窮状を知った地元の金沢町自治会（藤堂一男会長、百七十七戸）や市職員互助会（約千二百人）市職員労組連合会、市清掃センター、森野さんの親類が中心になって、このほど「睦也くんを救う会」を結成。稲枝地区連合自治会（約三千三百戸）も全面協力を決めて募金活動を展開することになった。救う会事務局の連絡先は、彦根市野瀬町二七九ノ一、市清掃センター内☎0749（26）2180。

（昭和63年8月6日『京都新聞』より）

・編集部より

皆様のあたたかいご支援のおかげで、目標額を大きく上回る約三千万円のカンパが集まり、森野氏一家は十月四日、西ドイツのハノーバー医科大学へと旅立たれました。手術の成功を心からお祈り申しあげます。

情報コーナー

特別講演会のご案内

1988年度京都精華大学　短期大学部英語英文科主催　第二回　特別講演会のお知らせ

とき　1988年11月2日(水)3：00pm

ところ　京都精華大学・流溪館二階会議室

テーマ　「私にとって東洋とは」

講　師　アレン・ギンズバーグ

＊通訳を予定しています。

アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)略歴

1926年　米国ニュージャージ州に生まれる。父はユダヤ系、母はロシヤ移民。

1943年　コロンビア大学入学。経済学を学ぶ一方、古典に関心を示す。

1945年　ある事件のとばっちりを受け、大学を停学。

1947年　ニューヨークに住む。ここを中心に活動、散文詩を書く。

1958年　一年間パリに住む。

1960年　亡き母に捧げる長詩『カディシュ』を完成。

1962年　インドに渡る。ベナレスに住み、ヒンズー教徒と生活を共にした。

1963年　インドより帰国。途中でベトナム、日本に立ち寄る。

1970年　この頃からギンズバーグは単なる詩人にとどまらず、アメリカにおける最大のヒンズー教の導師として社会的影響力を持つようになった。

1974年　詩集『アメリカの堕落』が全米図書館賞詩部門を受賞。

1986年　ギンズバーグ生誕60周年を記念して大冊の記念文集『ベスト・マインズ』が発行される。ポプ・ディラン、ヨーコ・オノら多くの友人からの詩やメッセージが掲載されている。

学外展

陳列　1／30、1／31、2／1～5

第19回　京都精華大学美術展

○卒業制作展（4年生）

京都市美術館（岡崎公園内）

○在学生作品展（1～3年生）

大学構内

会　期　1989年2月1日(水)～5日(日)

京都の伝統工芸

京都の伝統工芸（産業）講座後期日程

10月6日(木)「京の能衣裳」

モニカ・ベーター氏（元神戸女学院助教授）

10月13日(木)「日本の創作版画」

徳力富吉郎氏（版画家）

10月20日(木)「手芸と工芸」

伊砂　利彦氏（型絵染作家）

10月27日(木)「現代版画―工房の現状と将来」

星田　豊司氏（版画工房主宰）

11月10日(木)「日本の漆」

水内　杏平氏（漆芸家）

11月17日(木)「佛像彫刻」

江里　康則氏（佛像彫刻作家）

11月24日(木)「映画と美術」

井川　徳道氏（映画美術監督）

12月1日(木)「友禅の話」

羽田登喜男氏（日本工芸会理事）

※教室は春秋館101番教室、時間はいずれも午後1時～2時30分

※講師の都合で日程等に変更がある場合があります。

木野祭（11月1日～3日）

テーマ「声なき声」

メイン・イヴェント「けんかみこし」

入試日程

1989年度美術学部募集要項

出願期間　推薦入学試験11月18日～12月6日

一般入学試験1月19日～2月7日

試験日　推薦入試　デザイン学科12月13日～14日

造形学科12月16日～17日

一般入試　2月14日～16日

（デザイン学科、造形学科とも同じ）

公開講座のご案内

本学短期大学部英語英文科では、毎年ユニークで、内容のあるクラスを開講しています。来年度は卒業生もぜひふるって受講して下さい。四月初旬に講座および内容の案内ができあがります。

受講を希望される方は、京都精華大学教務課までお問いあわせください。

受講料　通年1科目　24000円

開　始　4月中旬

●1988年度　公開講座一覧

▼日本現代詩の翻訳（英詩）

―谷川俊太郎、俵　万智などの作品を追って―（前期のみ）

ハロルド・ライト先生

（毎週火13時～14時半）

▼女性学（通年・毎週月14：40～16：10）

おんなの歴史（通年・毎週木13：00～16：10）

藤枝澪子先生

▼点字英語（通年・毎週水13：00～14：30又は14：40～16：10）

岡村広子先生

▼メキシコ、および中南米―文化と歴史

（毎週火14：40～16：10）

ラウール・ニヴォン先生

▼映画からみたヨーロッパ

（通年・毎週土13：00～14：30）

ハルドール・ステファンソン先生

○「英詩」の授業を受けてみて

ライト先生は、アンティオーク大学の準教授で、授業はわかりやすい英語で行なわれます。左記は、私の訳した詩についての先生のメッセージです。

空の青海のあおさのその間

サーフボードの君を見つめる（俵　万智）

Betwween a blue sky

and a blue sea

I'm seeing you（これだとサーフボードの上で寝ているともとれる）

on the surfboard

※1行目Bで始まり4行目Bの音で消える。

1行目の Blue Sky と2行目の Blue Sea は対ですね。1行目の een [i:n] 3行目の eeing [i:n] と似た音をもってきてますね。でも全体的な力強さがほしい気もします。

（例）先生の訳

The blue of the sky

the blueness of the sea

and there between them

on a surfboard you're the one

my eyes are fixed upon

と、ざっと毎回こんな調子でやってますので、とてもおもしろいです。あっ！こんな表現のしかたもあるのか…へぇ～なんて感心したりもしますよ。

（清水華代　85年度英語英文科卒業）

AVセンターから

メディアの多様化は、私たちの知識・情報の取りこみ方に少なからぬ変化をもたらしてきました。大学での授業に、フィルム、ビデオ、スライドなどヴィジュアルな面からのアプローチが使われることも多くなりました。また現代の若者にとっては、音や映像は、ほとんど生活の一部をなすものになっています。精華では、もとは英語英文科の語学練習室として使われたLL教室が、映像時代を迎えてますます拡がる視聴覚活動の場、AVセンターとして多いに利用されています。70年代前半から、英語だけのワクにしばられずに、広くことば・音楽の資料を集めようと始まったテープライブラリーは、英語関係の資料はもちろんのこと、音楽ではクラッシック・ポピュラー、民族音楽などのテープ数千点を提供できるようになりました。その後ビデオ機器等の普及で映像資料（映画・ドキュメンタリー）を加えて、音と映像を総合的に扱うAVライブラリーとして活動しています。87年には、ビデオ・スライドなど映像設備を充実した施設へと改造され、今では、上映室、製作室、ライブラリー、そしてLL教室と、目的ごとの部屋をもって動いています。上映室には、6台のビデオ・ブースがあり、席の空く間の無いほどの盛況です。センター主催、または学生の自主的な上映会もひんぱんに行なわれています。これらを利用すれば、一昔前なら映画館通いで英語をモノにしたという修得法が、キャンパス内で即可能というわけです。全学の学生にひらかれていますので英語英文科と美術学部の学生の交流のさかんな場ともなっています。製作室は、教材製作や学生の自主的な映像作りに使われています。夜遅くまで両分野の学生たちが相混じって、共通の仕事に取り組んでいる姿も見られます。映像を受け身で見るだけでなく自己表現の手段として創造してゆくなかで、専攻をこえた若者たちが相互に刺激しあい共同の仕事をつくり上げるおもしろさが生まれています。人文学部ができれば、いっそうこの共通の場での活動はひろがりをもってくることでしょう。

卒業生の方も在学生同様にライブラリーの館内利用は可能です。上映会など催しものの時にでも訪ねてみて下さい。

KYOTO REVIEW 定価 500 円

問いあわせは「キョート・レヴュー」編集室まで

〈木野評論〉希望者は本学卒業生に限り、一部のみ無料。申し込みは入試広報室まで。

AVカタログ
希望者は本学AVセンターまで

●編集後記

本学はことし創立二〇周年を迎え、卒業生も総数約一万名にのぼった。これを機にはじめられた同窓会の結成および卒業生名簿の作成も近く実現の段階に入るという。

人文学部の誕生にむかうなど転機を迎える母校が卒業生として気になっていたとき、今回の「木野通信」の編集に携わることができたのは本当にうれしいかぎりだ。

私に編集をまかせ、つたなさをバックアップしてくださった教職員の方々にはお礼を申しあげたい。来年以降もひきつづき刊行できることを望んでやまない。（宮城明和）

1989年度入学案内
希望者は本学卒業生に限り、一部のみ無料。
申し込みは入試広報室まで。

卒業制作展作品集
定価 1500 円。希望者は学内の画箋堂へ。郵送料着払い。

〈同窓会設立総会〉へのおさそい

卒業生の皆様　如何お過ごしでしょうか、各方面でそれぞれご活躍の事と思います。秋がくるたび木野の里を、木野祭を想い出して居られる方も多いのではないでしょうか。今年も十一月三日は木野祭の真最中です。後輩達の木野祭を応援かたがた同窓会設立総会を開きましょう。多数のご参加をお待ちいたして居ります。

今年春より大学及び卒業生の有志により、「同窓会をつくろう会」と題して準備を進めてまいりました。皆それぞれの構想を立て、討論を重ねて、精華大学なりの同窓会がうぶ声を上げようとしています。

精華大学も大きくなりました。卒業生も九千人をこえているということです、これ以上大きくなりすぎないうちに精華をしっかり見ておきたいのです。

英語英文科という名前も無くなるようです。どんどん精華が発展していく様子も知りたいと思います。同窓会に何が出来るかは未定です。しかしこんな同窓会であってほしいという希望は沢山あると思います。

今も精華には校章も校歌もないと聞いています。もしかしたら同窓会歌の方が先に出来てしまうことだってありうるかも知れません。

精華大学で共にしたあなたと大学で再会出来る事を楽しみにしています。

「同窓会をつくろう会」有志一同

日時　一九八八年　十一月三日(木)
　　午前十二時（正午）より
場所　京都精華大学・明窓館二〇一教室

総会終了後、入学年度又は専攻コース別に分かれて懇親会を予定しています。先生方も多数参加されます。

車でのご来場はご遠慮ください。

もくじ

人文学部誕生にむかって ―― 2
サバーティカル ―― 3
サンフランシスコ・アート・インスティテュートに学んで ―― 5
ロンドン見聞記 ―― 6
教職員の消息 ―― 7
海外研修プログラムの出来事 ―― 8
私にとっての中国留学 ―― 9
私達のあんぱんてりぶる ―― 10
ラグビー部創部二十周年記念式もたれる ―― 10
卒業生からの便り ―― 11
ともや君にご支援を ―― 12
情報コーナー ―― 14
AVセンターから ―― 15
精華の出版物案内 ―― 15
同窓会設立総会へのおさそい ―― 16

表紙イラスト　美術学部教授　佐川美代太郎

京都精華大学
Kyoto Seika University
〒606 京都市左京区岩倉木野町137 TEL(075)791-6131(代) FAX(075)722-0838